THE FUKUOKA
ASIAN CULTURAL PRIZES

1992年（第3回）
福岡アジア文化賞

THE 3rd
FUKUOKA ASIAN CULTURAL PRIZES
1992

1992年（第3回）福岡アジア文化賞授賞式
The 3rd Fukuoka Asian Cultural Prizes 1992 Presentation Ceremony

会場を埋めた授賞式参加者
The ceremonial hall was filled to capacity.

授賞後、握手をかわす金元龍氏と
桑原市長
Mayor Kuwahara congratulated Professor Kim Won-yong.

川合理事長から賞状を受け取る
クリフォード・ギアツ氏
Mr. Kawai, Chairman of the Yokatopia Foundation, presented the diploma of honor to Professor Clifford Geertz.

竹内實氏への賞状を読みあげる
川合理事長
Mr. Kawai read Professor Minoru Takeuchi's award citation.

川合理事長から、レアンドロ・V・
ロクシン氏へメダル、賞状の贈呈
Mr. Kawai presented the medal and diploma of honor to Mr. Leandro V. Locsin.

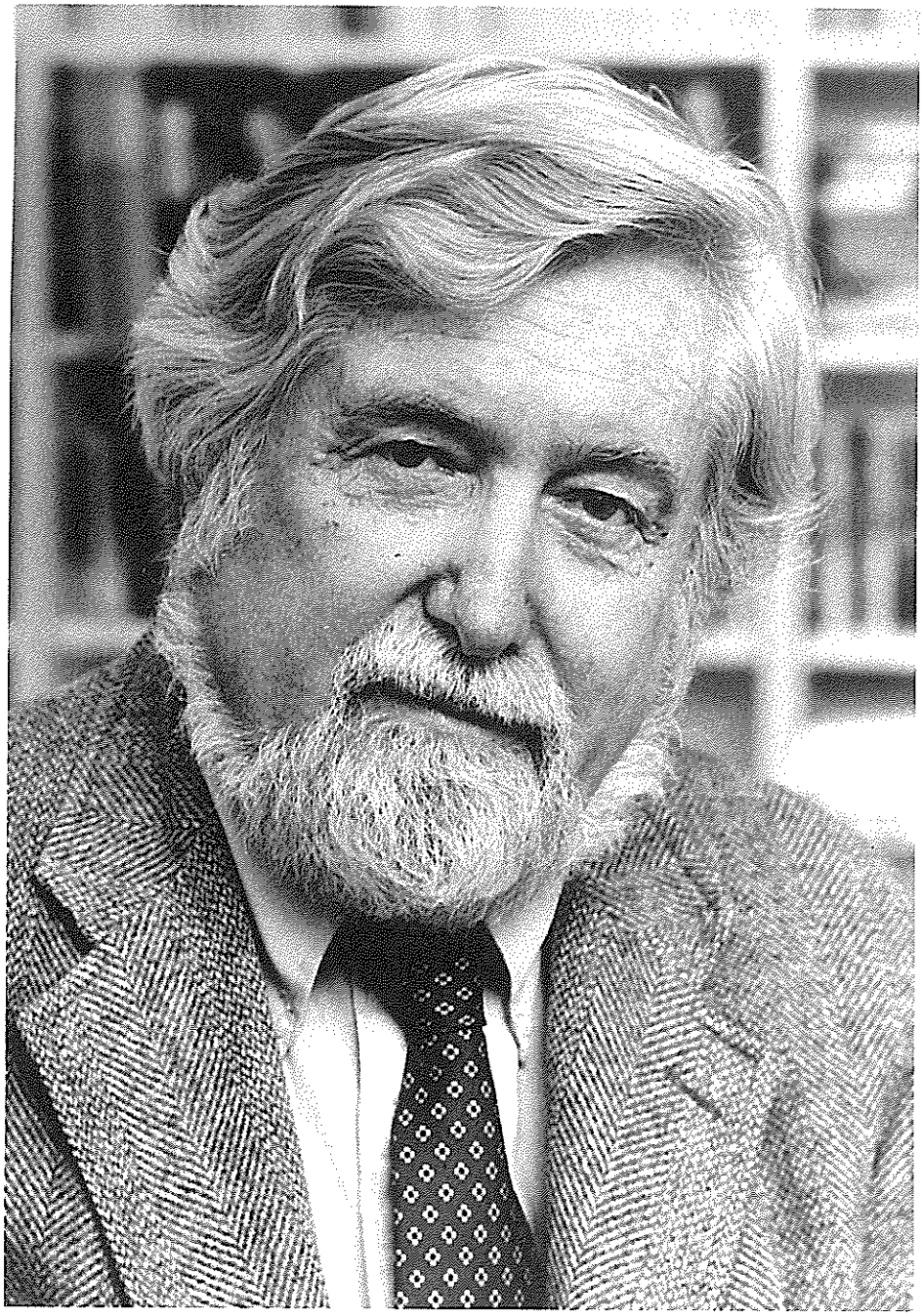
会場で紹介される各国大使御夫妻
Ambassadors of Asian countries and their spouses were introduced to the audience.

林英哲氏、竹井誠氏による祝曲演奏
Mr. Eitetsu Hayashi and Mr. Makoto Takei performed a ceremonial musical performance.

福岡インターナショナルスクールの生徒から受賞者へ花束の贈呈
Students from Fukuoka International School presented the recipients with flower bouquets.

授賞式のフィナーレ。各国大使御夫妻もステージに上がられ、受賞者を称えられた。
The Prize Presentation Ceremony Finale. On the stage, the Ambassadors of Asian countries and their spouses praised the recipients.

金　元　龍
KIM Won-yong



クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ

竹内　實
Minoru TAKEUCHI

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN

大　賞

氏　名　金（キム）　元（ウォン）　龍（ヨン）
(KIM Won-yong)

生年月日　1922年8月24日（70歳）

国　籍　大韓民国

プロフィール

平安北道泰川（ピョンヤンブクドテチョン）（現在は朝鮮民主主義人民共和国内）で生まれ育った金元龍氏は、1945年に京城帝国大学（現ソウル大学校の前身）法文学部史学科を卒業、南北分断、朝鮮戦争の動乱の中、10年以上にわたり国立博物館に勤務する。その間、ニューヨーク大学大学院で東洋美術史研究を重ね、1962年ソウル大学校考古人類学科の教授に就任。以降、国立博物館館長、韓国美術史学会会長、韓国考古学研究会会長、歴史学会会長、文化財委員会委員長、ソウル大学校大学院長等、数々の要職を歴任し、現在はソウル大学校名誉教授、翰林（ハルリム）大学校科学院長の職にある。

第二次世界大戦前、朝鮮半島の考古学研究は日本人によって行われてきたが、戦後、金氏は、韓国人としてその学問的基盤の構築に尽力した。さらに視野を広く東アジア全域にとり、中国や日本等との歴史的関係の中で韓国考古学・美術史学の体系的な位置付けを先駆的に行った。また、学界のリーダーとして主要な遺跡調査に携わり、研究の発展に大きく寄与、後進の育成にも努めてきた。一方、高松塚古墳をはじめ、藤ノ木古墳・吉野ヶ里遺跡の発見の際には、調査やシンポジウム等で来日、示唆に富んだ発言で日本考古学界にも多くの影響を与えている。欧米各地における講演活動も活発で、韓国文化を広く世界に紹介、いわば韓国の顔として国際交流にも著しい貢献をなしている。

主な著作

The Arts of Korea（共著）ロンドン，ニューヨーク，1964　『韓国美術史』1968（邦訳1976）
『韓国考古学概説』1973（邦訳1984）『韓国考古学年報1～14』1974～87
『韓国文化の起源』1976（邦訳『韓国文化の源流』1981）
『韓国美の探求』1978（邦訳1982）『韓国壁画古墳』1979
Recent Archaeological Discoveries in the Republic of Korea　東京，1983
Art and Archaeology of Ancient Korea『韓国美術Ⅰ－古代美術』（編）東京，1986
『韓国考古学研究』『韓国美術史研究』1987　『韓国の考古学』（編）東京，1990
『随筆集　日々の出逢い』東京，1990

（出版地のないものはソウルにて出版）

贈賞理由 〈金 元 龍〉

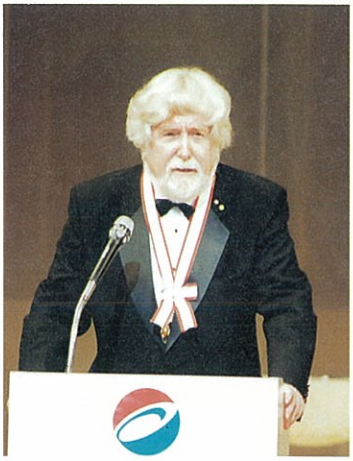
金元龍氏は、現代のアジアを代表する考古学・美術史学者の一人である。同氏がフィールドとする朝鮮半島における考古学の調査と研究は、第二次世界大戦まで、日本人によって行われてきた。終戦後、当然のことながら朝鮮半島の人々の手によって考古学的調査・研究が行われるようになると、金氏は先頭に立って新しい考古学の体系を創造し、構築してきた。同氏は、考古学におけるもっとも基礎的で、重要な課題である土器編年に関して、いち早く三国時代の新羅土器を素材として実践し、その後の方向性の一端を示した。そして、各地で重要遺跡の調査に従事しながら、さらに美術史学の分野へと研究領域に広がりを見せたのである。そうした蓄積の成果は、1970年前後に相次いで、『韓国美術史』と『韓国考古学概論』として結実した。それらは、第二次世界大戦後、韓国人によってはじめて考古学・美術史学の体系化と基盤形成を達成したものとして評価できる。その後も、たとえば旧石器時代の全谷里遺跡や百済の武寧王陵の発掘調査を指揮し、その研究成果を通じて、朝鮮半島の悠久で独自な歴史と文化、ならびに、法則性もしくは国際性を世界に知らしめた。

そのような金元龍氏の学問的業績は、主として『韓国考古学研究』や『韓国美術史研究』の二つの大著に収められているが、そこに流れる視点は、朝鮮半島の考古学・美術史学を東アジア全体の中で位置づけようとするものである。そのことは、中国はもちろん日本の古代文化への深い関心にもつながるが、とりわけ高松塚古墳・藤ノ木古墳そして吉野ヶ里遺跡の理解に際して、東アジアの中での朝鮮半島と日本列島の密接な関連性に、幾多の傾聴すべき指摘となって現われている。

一方、金元龍氏は、韓国における学術・文化に関する多くの要職を歴任し、また、日本をはじめアメリカ・ヨーロッパで講演や講義を行うなど、韓国内外の後進の育成に努め、学問研究の啓蒙に大きく寄与している。

このように、金元龍氏の功績は、韓国の考古学・美術史学を東アジアの視野で体系化し、その発展に大きな貢献を果たしたばかりでなく、アジアの文化の意義を広く世界に示したと評価できるものであり、まさしく「福岡アジア文化賞―大賞」に相応しい業績といえる。

学術研究賞・国際部門



氏　　名　クリフォード・ギアツ
(Clifford GEERTZ)

生年月日　1926年8月23日（66歳）

国　　籍　アメリカ

プロフィール

サンフランシスコに生まれたギアツ氏は、オハイオ州のアンティオク・カレッジで文学と哲学を学んだが、より実証主義的な学問に興味をもつようになり、ハーバード大学大学院へ進学、文化人類学を専攻した。1952～54年にインドネシアのジャワ島で最初のフィールドワークを行い、その成果を帰国後『ジャワの宗教』と題した著作にまとめ、博士号を取得。その後、ハーバード大、カリフォルニア大、シカゴ大等で教鞭を執る。また、その間、バリ島やモロッコでも調査を重ねて、顕著な業績を発表し続けた。1970年、プリンストン高等研究所社会科学教授に就任、現在に至るまで精力的に研究活動を続けている。

ギアツ氏の研究領域は、政治・経済・歴史・宗教・社会変動を含む広範多岐にわたっており、その影響力は人類学界のみならず広く他の人文・社会諸科学に及んでいる。アジア世界の文化をいかに理解するかという課題について徹底的な思索を積み重ね、「文化」を「意味のシステム」として解釈する独自の「解釈人類学」を提唱し、同時代における最も独創的かつ刺激的な人類学者という評価を得る。19世紀のバリ島を素材とする著書『ヌガラ』で提出された「劇場国家」の概念は、日本においても大反響を巻き起こした。

また、数々の学術雑誌の編集の任務をこなし、アメリカ国内はもとより英国人類学会をはじめとする国外研究機関の学術顧問を歴任する等、氏の活動領域は国際的な規模に及んでいる。

主な著作

『ジャワの宗教』グレンコ（イリノイ州），1960

『農業の退縮 ── インドネシアにおける生態学的変化の過程』バークレイ，1963

『行商人と貴族 ── インドネシアの二つの町における社会変化と経済の近代化』シカゴ，1963

『インドネシアのある町の社会史』ケンブリッジ，1965

『イスラムを観る ── モロッコとインドネシアにおける宗教の展開』ニューヘブン（コネティカット州），1968　（邦訳『二つのイスラーム社会』1973）

『文化の解釈』ニューヨーク，1973（邦訳『文化の解釈学Ⅰ・Ⅱ』1987）

『バリの親族体系』（共著）シカゴ，1975（邦訳1989）

『ヌガラ ── 19世紀バリの劇場国家』プリンストン，1980（邦訳1990）

『ローカル・ノレッジ ── 解釈人類学論集』ニューヨーク，1983（邦訳1991）

『作品と生 ── 著者としての人類学者』スタンフォード，1988

贈賞理由　〈クリフォード・ギアツ〉

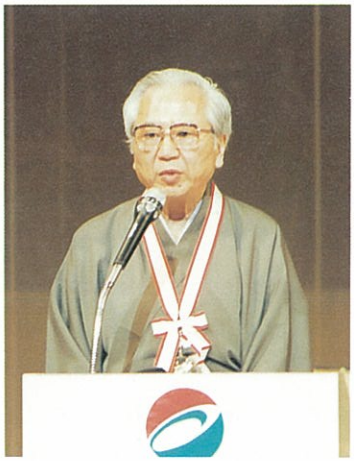
クリフォード・ギアツ氏は、東南アジア研究の分野で最も独創的な業績を積み重ねるとともに、異なる文化や社会をどのように理解したらよいのかということについて極めて優れた方法論を提示してきた人類学者である。深い思索の結晶として生み出されたこれらの研究成果は、単に文化人類学にとどまらず、人文科学・社会科学の諸分野に広範な影響を与えてきた。

東南アジア世界が「地域研究」という新しい研究領域として立ち現れたのは、第二次世界大戦以降であるが、その際、戦前までの植民地研究から離脱し文字通り新しい学問として自立するためには、克服すべき多くの困難な課題が存在した。中でも、現に生きている社会や文化をどう捉えるのか、また自ら語ることのない無名の人々がそれぞれの社会や文化をどう捉えているのかを明らかにすることは、最も重要な課題であった。そのためには、長期の臨地研究に加え、優れた研究視角と誠実な研究姿勢とが何よりも求められていた。ギアツ氏こそ、この課題に最も早く応えるとともに、その後も倦むことなく取り組んできた研究者である。その知的誠実さと思索の深さ、果たしてきた貢献の大きさは東南アジア研究の中で屹立しており、同氏は一貫して学界の卓越したペースメーカーであったといえるだろう。

ギアツ氏の研究は、ジャワ島の小さな地方都市での宗教調査から始められた。その成果『ジャワの宗教』は、プリヤイ・サントリ・アバンガンという文化概念を提示したことで余りにも有名であり、東南アジア文化研究の古典としてゆるぎない地位を占めている。それ以降に同氏が提示してきた様々な分析視角や概念枠組は、文学的ともいえる香り高い文体とあいまってその都度、研究者の間に広く受け入れられるとともに、東南アジア研究の学問的レベルを顕著に高めてきた。例えば、同氏の提唱した「模範的中心」と「劇場国家」、「農業のインボリューション」と「貧困の分かち合い」、「水田と焼畑の生態系」、「バザール経済」などは、それぞれが新しい研究領域を切り開くものであり、新しい研究の方向を照らし出すものであったと言っても過言ではない。

このように、クリフォード・ギアツ氏がアジアの文化と社会のために果たしてきた知的貢献はまことに大きく、まさしく「福岡アジア文化賞—学術研究賞・国際部門」に相応しい業績といえる。

学術研究賞・国内部門



氏　名　竹内　實
（たけうち みのる）

生年月日　1923年6月12日（69歳）

国　籍　日本

プロフィール

中国山東省張店に生まれた竹内氏は、“満州国”新京（現在の吉林省長春）で十代を過ごした。この体験は、氏の堪能な中国語だけでなく、後の研究者としての基本姿勢を形作った。1949年に京都大学文学部中国文学科を卒業後、東京大学文学部大学院を修了して、中国研究所に勤務。中国語教育にも関わる一方、現代中国文学の紹介に努める。その後、10年余にわたり東京都立大学の教壇に立つが、この間、野間宏らと中国を訪問し、毛沢東との会見記を発表、また武田泰淳とともに『毛沢東　その詩と人生』を刊行し、それまでにない人間的な側面に迫って注目された。1973年に京都大学人文科学研究所に招かれ、新設の「現代中国」部門を担当、共同研究を主宰、のちに所長を務める。同大退官後、立命館大学国際関係学部新設に参加、学部長を経て、現在同学部教授の職にある。

竹内氏は、現代中国を従来の政治、経済といった社会科学的視点に加えて文学、思想、歴史学などの視座をも抱摂した総合的な文脈の中で解析するという独自の現代中国論で知られる。氏の提出してきた現代中国理解の概念は、日本のみならず中国、香港、台湾にも多大な影響を与え、その幅広い国際交流から欧米においても高い評価を受けている。また、中国文学研究、毛沢東、魯迅研究の碩学でもあり、著書も多い。中国の風土と世界像を生活面から描き出した『茶館』は中国語に翻訳され、“中国を理解し愛する竹内氏は、半ば中国人である”と賛辞を送られた。

主な著作

『毛沢東　その詩と人生』（共著）1965　『日本人にとっての中国像』1966
『中国の思想 ── 伝統と現代』1967　『毛沢東集』（監修）1969～71
『現代中国の文学 ── 展開と理論』『毛沢東と中国共産党』1972
『茶館 ── 中国の風土と世界像』1974　『中国への視角』1975
『同時代としての中国』『紀行　日本の中の中国』1976　『魯迅遠景』1978
『友好は易く理解は難し』1980　『中国喫茶詩話』1982
『中国生活誌 ── 黄土高原の衣食住』1984　『中国文学最新事情』（共編），
『現代中国の展開』1987　『転形期の中国』京都，1988　『毛沢東』1989
岩波講座現代中国第5巻『文学芸術の新潮流』（編著），『愛のうた ── 中華愛誦詩選』1990
（出版地のないものは東京にて出版）

贈賞理由 〈竹　内　　實〉

竹内實氏は、日本における中国研究の第一人者である。現代中国論は比較的新しい研究領域であり、主に政治、経済など社会科学の分析枠組からすすめられてきた。同氏は、混沌とした現代中国を社会科学的視点に加えて、文学・思想・歴史学などの視座を含んだ総合的な文脈の中で解析、いわば“竹内中国学”ともいえる新しい現代中国論を構築してきた。

竹内氏を、卓越した研究者として特徴づけているのは、ありのままの現代中国を冷静に見つめるその研究姿勢と独自の視点である。従来の現代中国研究は、教義的な分析と安易な理論化に流れる傾向にあった。同氏は、同時代の世界の中に中国を位置付け、イデオロギーに左右されずに具体的な事実を事実として直接受け止め、とらえてきた。その一方で、現代中国をその連綿たる歴史、伝統に沿って理解する視点は、膨大な古典にまでも及ぶ広く深い学識に裏打ちされた同氏ならではのものといえる。こうした枠組みに基づく徹底した洞察は、現代中国を理解する様々な基本概念を生み出してきた。例えば90年代に向けて提出された「転形期」という概念は、日本国内のみならず香港、台湾にも大きな影響を与え、中国を再認識するきっかけをもたらしている。誠実な研究者として定評のある同氏は、どの視角で見れば中国の真実が見えてくるのかというヒントを、絶えず人々に投げかけているのである。

また、戦後の新しい中国語教育に携わる一方、現代中国文学の紹介に努めてきた竹内氏は、なかでも魯迅・毛沢東研究に著しい業績をあげている。世界に先駆けて編集された毛沢東の原典集『毛沢東集』は、中国を含む各国の研究者に確固たる研究の基礎を提供しており、とりわけ欧米の研究者に対して毛沢東の人間的研究への道を示し、その影響は計り知れないものがあると言えよう。国交正常化20周年を迎える日中関係に対する発言も多く、国際的な学術交流にも大きな努力を傾けてきた。

このように、竹内實氏の中国研究における功績は、人々の真の中国理解に大きく貢献したと評価できるものであり、まさに「福岡アジア文化賞―学術研究賞・国内部門」に相応しい業績である。

芸術・文化賞

氏　　名　レアンドロ・V・ロクシン
(Leandro V. LOCSIN)

生年月日　1928年8月15日（64歳）

国　　籍　フィリピン

プロフィール

ネグロス島シライに生まれたロクシン氏は、幼い時から音楽に親しみ、ピアニストを目指してマニラのサント・トマス大学音楽学校に進学するが、以前から抱いていた建築への興味が増し、途中で建築科に編入学している。卒業後2年目に、教会礼拝堂の設計を手掛け、円形の斬新な建物により27才の若さで一躍、脚光を浴びた。以降、公共施設、住宅、ホテル、商業ビル、教会等多くの作品を生み出していく。代表的な作品として、都市景観に新しい形態を提供したフィリピン文化センターの建築物群があげられる。国外では世界最大の宮殿であるブルネイの王宮を設計、氏の最大の作品となっている。また、1970年の日本万国博覧会ではフィリピン館を手掛けた。

ロクシン氏の作品は、「フィリピン建築とは、東洋と西洋というあまりにも異なり相対する二つの文化の大きな流れが収斂された産物である」という信条に基づき、設計されている。現代建築を、東南アジアの風土性やフィリピンの伝統様式の中に定着させ、美しい調和を創出した点において高く評価される同氏は、1990年にはフィリピン芸術への貢献により国民芸術家として顕彰されている。

建築以外の分野にも造詣が深く、現代舞踊の舞台美術をデザインする一方、陶器に関する著書を出版するなど、幅広い活動を行っている。フィリピンが誇る文化人の一人である。

主な作品

「ホーリーサクリファイス礼拝堂」（フィリピン大学構内の教会）ケソン，1955

「フィリピン文化センター建築物群」マニラ

- 「舞台芸術劇場」1969「民俗芸術劇場」1974
- 「フィリピン国際貿易展示センター」「フィリピン国際コンベンションセンター」
- 「フィリピンプラザホテル」1976

「日本万国博覧会フィリピン館」大阪，1970

「マカティ証券取引所」マニラ，1971

「ブルネイ王宮」バンダルスリブガワン，1984

「フィリピン最高裁判所」マニラ，1991

作品集　*The Architecture of Leandro V.Locsin*　ニューヨーク，東京，1977

贈賞理由　〈レアンドロ・V・ロクシン〉

レアンドロ・V・ロクシン氏は、東南アジアの風土の中に現代建築を定着させたフィリピン屈指の建築家である。

フィリピンを取り巻く自然環境は、高温多湿で台風が多く、火山地帯に属し地震が多いことで知られる。そのため建築物には通気性や耐久性が要求され、伝統的な建物は独特の大きな屋根や庇、高い天井などの構造を持つ。ロクシン氏は、これらの気候風土に応じた構造を、現代建築のスケールと空間において見事に昇華させている。また、格子や独特の曲線などをモチーフとするフィリピンの伝統様式を、西洋的現代性の造形美の中で独自の解釈を加え、豊かに表現している点も見落とすことはできない。こうした作品の独創性の背景には、同氏の建築のテーマである東西文化の調和あるいは統合という理念が存在する。この理念こそが、欧米に生まれた現代建築をフィリピンに根付かせたと言えるだろう。

また、ロクシン氏は音楽、美術など建築以外の芸術分野においても造詣が深く、さまざまな芸術家としての顔を持っている。幅の広い芸術センスは、建築において発揮される時、その細部においては計算し尽くされた造形美を、外観においては新しい都市景観を創造してきた。こうした同氏の作品と才能は、フィリピンの国内外において高い評価を受け、多くの賞を受賞してきた。従来、欧米への留学・研鑽が不可欠とされてきたフィリピン建築界にあって、まさにフィリピンで生まれ育った同氏がその舞台を決して離れることなく、極めて質の高い建築物を作り続けてきた事実は注目に値すべきであり、同氏に続くアジア諸国の若き建築家たちに影響を与えずにはおかないであろう。

このようにレアンドロ・V・ロクシン氏の果たしてきた功績は、アジアの建築文化の発展とその正当な評価に著しく貢献したものであり、まさしく「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」に相応しい業績といえる。

公式行事スケジュール

行事	日時	場所	内容
授賞式	9月3日（木） 14:30～16:00	福岡サンパレス	・1992年（第3回） 福岡アジア文化賞授賞式 ・参加者：約1,300名
記者会見	9月3日（木） 16:20～17:00	福岡サンパレス パレスルームA	・受賞者による記者会見
祝賀会	9月3日（木） 18:00～19:30	ホテル日航福岡 3階「都久志」の間	・在日アジア各国大使御夫妻、市民、留学生のほか関係者の参加による祝賀会 ・招待者：約800名
市長表敬訪問	9月4日（金） 13:30～14:00	福岡市役所 特別応接室	・受賞者御夫妻による市長表敬訪問
記念講演会	9月4日（金） 14:00～16:00	福岡市役所 15階　講堂	・受賞者による記念講演会 ・参加者：約550名

授賞式

日　時：9月3日（木）　午後2時30分〜4時
場　所：福岡サンパレス

1992年（第3回）福岡アジア文化賞授賞式は福岡サンパレスで行われました。

第3回の受賞者は、大賞が金元龍氏（大韓民国）、学術研究賞・国際部門がクリフォード・ギアツ氏（アメリカ）、学術研究賞・国内部門が竹内實氏（日本）、芸術・文化賞がレアンドロ・V・ロクシン氏（フィリピン）の4名でした。

式典は午後2時30分から、在日アジア各国大使御夫妻、留学生及び学術・教育・芸術・文化関係者、市民等約1,300名の御参加を得て開催され、受賞者の栄誉を称えました。

また、祝曲として、林英哲氏らによる和太鼓演奏等が行われ、授賞式を盛り上げました。

受賞者
The Fukuoka Asian Cultural Prize vecipients

式 次 第

開　　式	14：30		
	贈賞者入場・受賞者入場		
祝 曲 演 奏	「鶴の巣籠」 演奏：竹井　誠		
主催者代表挨拶	福岡市長		桑原　敬一
来 賓 挨 拶	文化庁長官		内田　弘保
〃	地球環境・アジア太平洋協力担当大使		赤尾　信敏
選考経過報告	福岡アジア文化賞選考委員会委員長		
		前九州大学学長	高橋　良平
贈 賞 理 由	大賞選考委員長	九州大学教授	西谷　　正
贈　　賞	福岡市長		桑原　敬一
受賞者挨拶	金　元　龍		
贈 賞 理 由	学術研究賞選考委員長	上智大学教授	石澤　良昭
贈　　賞	(財) よかトピア記念国際財団理事長		川合　辰雄
受賞者挨拶	クリフォード・ギアツ		
贈 賞 理 由	学術研究賞選考委員長	上智大学教授	石澤　良昭
贈　　賞	(財) よかトピア記念国際財団理事長		川合　辰雄
受賞者挨拶	竹　内　　實		
贈 賞 理 由	芸術・文化賞選考委員長	国立民族学博物館教授	藤井　知昭
贈　　賞	(財) よかトピア記念国際財団理事長		川合　辰雄
受賞者挨拶	レアンドロ・V・ロクシン		
祝 曲 演 奏	「宴」 演奏：林　英哲　　共演：竹井　誠		
閉　　式	16：00		

司会：山下征治（NHK福岡放送局チーフアナウンサー）

受賞者挨拶

金　元　龍

1972年、高松塚古墳が発見されて以来、私は殆ど毎年のように、日本を訪れました。そして、来るたびに、日本という国の文化の大きさに感銘を受けました。日本がアジアの諸国に先駆けて先進国となったのも、この文化の力のせいであり、それは先史時代以来の胸をはだけて外国文化を受け入れた精神的姿勢のためであると考えられます。福岡アジア文化賞も、結局は、こうした国際的文化観の上に立っていると私には考えられ、それ故に本賞のアジア文化における意義は大きなものであると信じます。

今日、この意義深い文化賞の、しかも大賞を受けるということは真に身に余る光栄でありますが、しかし私自身、果たしてそういう資格があるのであろうか、殊に韓国からの最初の受賞者に選ばれる資格があるのであろうか、心配であり、心から恐縮している次第であります。私は、アジア文化発展のために何もやったことがありません。平凡な考古学徒として、自分の国の古代文化を学んで来たものに過ぎません。唯、私は、文化というものは、大きな川の水みたいに、方々のいろいろな水が混ざり集まって出来上がるものと考えており、出来るだけ民族を乗り越えたより広い視角で、古代文化を見ようと努めてきました。もし、私に福岡アジア文化賞の精神と何か連がる一点があるとすれば、そうしたアジア的視点で古代文化を捉えようとした心がけであるかもしれません。

私は今年で古稀の齢になりますが、今日の受賞で、10年位は若返ったような気持ちでありますので、これからも大いに勉強して、皆様の御厚意にお報いしようと考えております。

福岡市長並びに関係者の皆様、文化賞委員会、同選考委員会の皆様、そして御参席の来賓の皆様、本当に有難うございました。心からお礼申し上げますと共に、日本の対アジア地域の文化的、経済的窓口あるいは玄関としての、福岡市の今後の大発展を祈ってやみません。

金元龍

受賞者挨拶

クリフォード・ギアツ

福岡市長、福岡アジア文化賞委員会の皆様、そして、ご来場の皆様。

本日、このような名誉ある賞をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

私はこれまで、アジア文化、中でもことにインドネシア文化、あるいはもう少し広げて、インドネシア周辺地域全体の文化に40年以上、成人して以後のほとんどの年月をかけて関わってきました。私は人類学者ですが、人類学という学問の大半は書物からのみ得られるものではなく、市井の人々、村人たちとのなかで長期滞在をすることから得られるものです。私が共に暮らしたインドネシアの人々は、素晴らしい心の広さと愛情をもって、あるいは、それは時に好奇心であったと思うのですが、私を歓待してくれました。受賞に当たって私の心に浮かぶのは、この人々であり、何年もかけて彼らとの間に築いてきた異文化間の絆のことであります。アジア文化研究に対する賞を、アジアの国がアメリカ人学者に授賞するという寛大さこそ、この異文化間の絆を象徴していると言えるでしょう。それは、ひいては私個人にたいする評価にとどまらず、異なる国の人々の間にも真の理解、真の友情が可能であるという事をも、象徴しているのでしょう。

また、本年の受賞者、そして過去二年の受賞者のような著名な方々とともに受賞できることも、私にとって、大変に名誉なことであります。福岡市ならびに市民の方々は、この福岡アジア文化賞を創設し、それをこのように格調高く寛大な心をもって授賞なさることで、国際理解およびアジア文化の評価と活性化に大きく価値ある貢献をなさっていると思います。古くより、アジアそしてアジア文化の多様性に、積極的に関わって来たことでよく知られている福岡の伝統は、この福岡アジア文化賞創設でとられたイニシアティブの中にも、よく現われています。

このような意義ある賞を頂きましたことに、心より感謝申し上げます。有り難うございました。

受賞者挨拶

竹内　實

ここ九州の地は、はるかな昔から、海を渡ってきた文化がまず上陸した歴史をもっております。地理的にも近い大陸、半島、島々との関係は時代を追って、いっそう深いものになりました。とくに近代中国の変革にさいし、この地の少なからぬ志士仁人が義侠の真情を尽くしたことは、いまも記憶にあらたであります。

このような歴史の啓示をうけて、福岡市が「アジア」と「文化」の名を冠した賞を創設されたことは、これまでもっぱら「受容」し「摂取」することに熱心であった日本文化の特質にたいし、転換の一石を投じたものと思います。

「徳　孤ならず」とは、アジアの偉大な思想家、孔子の名言でありますが、これはまた、博愛衆に及ぼしてこそ、徳が徳として確立するものであることを教えているようでもあります。福岡市の積極的な姿勢は、日本のこれからの文化の方向を示し、その先頭を切ったものとおもいます。

特に第1回において、中国の文学者、巴金先生に賞を贈られたことは、日中両国の文化的交流のうえからも、まことに感銘深く承わったのであります。中国研究の末端につらなる一研究者として、まことに喜ばしく感じ、かつ文化賞委員会の先生方の識見に敬意を抱きました。

さて、このような有意義な賞ではありますが、それが、ここで私に授与されようとは夢にも思わなかったことでありました。私はただ、そのとき、そのとき、自分で樹てた課題と、自分自身に課した戒律に従って、夢中になって研究してきたにすぎません。自分のしていることが、果たして研究と名づけられるものであるか、どうかも、考えたことがありません。相手とするもの、対象とするもの、それを理解しなければならない、それは、研究して理解するに値するものである、ということは自ら信じていましたが、しかし、周囲からはこのような自分は理解されないだろうと思っておりました。

このようなとき、わたしの依りどころとなったのは、さきほどの孔子の言葉でありました。そして、ここで福岡市のみなさんが、孔子の言葉を今日、現在、現実のものとして、わたしに賜わったのであります。

ただただ、感謝の念で、いっぱいであります。これからも、この賞の輝きにみちびかれ、皆さまのご好意を忘れることなく、研究に従事する所存であります。

まことに、まことに、ありがとうございました。

竹内実

受賞者挨拶

レアンドロ・V・ロクシン

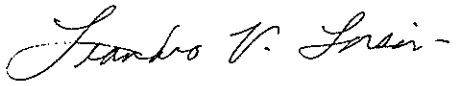
福岡市長様ならびに福岡アジア文化賞委員会、御来賓そして御来場の皆様。

1992年（第3回）福岡アジア文化賞受賞の名誉に浴し、心から感謝申し上げます。多様なアジア文化の評価と相互理解を通じて、アジア地域の調和と繁栄を目指す福岡市によって創設されたこの賞を受賞することは、フィリピン人建築家である私にとって、非常に意義深いことであります。

日本は、その先進科学技術やビジネス・産業でおさめた大成功によって多くの賞賛を浴び、羨望の的となっている国ですが、それ以上に素晴らしいのは、伝統的価値が現代の芸術文化のなかに見事に生かされているという点です。このように歴史的に美意識に優れた人々からの評価を受けたということで、私の芸術・文化賞受賞はその意義を倍加するものであります。

フィリピン人として、私は自国の多種多様な伝統の中で育ちました。その多種多様の伝統とは、古代からの土着の文化、近代になって入ってきたスペイン統治時代の文化およびアングロ系白人の文化を意味しますが、ここ数十年、多くのフィリピン人が感じてきたのと同様に、私も東南アジア、中国、日本、インドそして環太平洋諸国との文化的つながりを増々感じるようになって来ました。この、私たちをつないでいる絆をより広く理解することによって、アジア特有の伝統をより評価するようになってきました。私は自分の仕事の中に、アジアと西洋が豊かに混じり合った文化－それがフィリピン文化なのですが－を反映させようと努めてきましたが、それは多くの伝統的感性を現代あるいはポストモダンの創造的テクノロジーで統合しようとする試みでもありました。この芸術・文化賞の受賞は、これまで進んで来た方向が正しかったことを私に確信させるものであります。

今日のこの福岡アジア文化賞授賞が、他のアジアの人々にフィリピン文化の様々な面を知っていただける道を開くことを切に願うものです。このような素晴らしい賞をくださいました福岡アジア文化賞委員会の皆様に感謝いたします。



祝曲演奏

祝曲として、竹井誠氏の「尺八」による「鶴の巣籠」、さらに林英哲氏の「和太鼓」と竹井誠氏共演による「宴」が演奏され、授賞式を盛り上げました。

演奏者　　竹井　誠

1956年、東京生まれ。中学・高校時代は、ピアノ、トロンボーンに親しみ邦楽器とは無縁に過ごす。埼玉大学理工学部数学科に入学後、サークル活動で尺八を始める。在学中に日本音楽集団（創立26年の和楽器のオーケストラ）に入団し、篠笛、能管にも興味を抱き、その演奏に取り組む。NHK邦楽技能者育成会などを経て、現在は日本音楽集団の団員として、また歌舞伎囃子の笛奏者として、各種ライブ等の演奏活動と共に、カルチャーセンター等でアマチュアの指導を行っている。

演奏者　　林　英哲

1952年、広島県生まれ。佐渡「鬼太鼓座」の創設に参加、以来、11年間メイン奏者として、大太鼓を叩き続ける。82年、初めての和太鼓ソロ奏者として独立。カーネギーホールでアメリカンシンフォニーと共演したり、西ベルリンで開かれたユニセフパーカッションフェスティバルに参加するなど海外でも話題を呼び、アメリカやヨーロッパ各地での公演で人気を博した。また、映画やテレビドラマ、CM、ファッションショーの音楽制作等も手掛けるなど、伝統とジャンルを越えて多彩に活躍中。

記念講演会

日時：9月4日（金） 午後2時～4時
場所：福岡市役所15階講堂

1992年（第3回）福岡アジア文化賞記念講演会を、授賞式の翌日、福岡市役所の15階講堂で行いました。

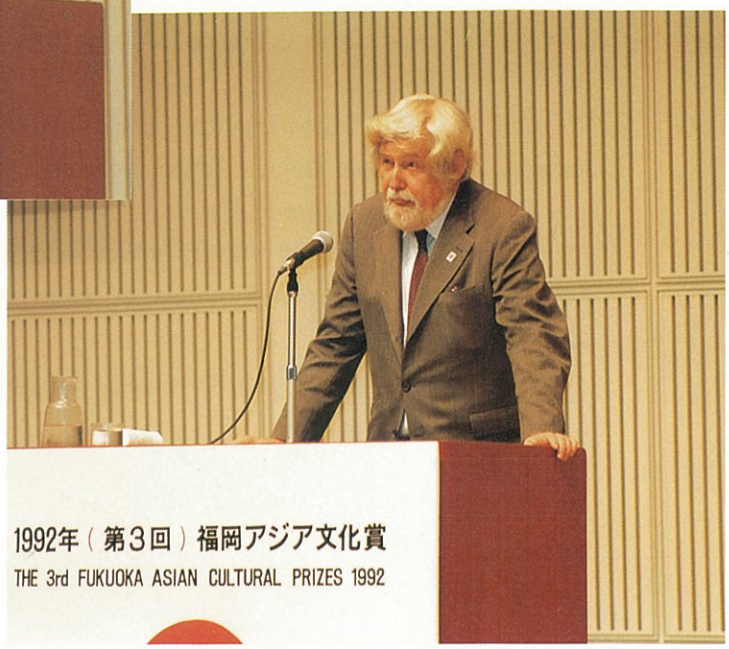
記念講演会は、受賞者と市民が直接的に触れ合うことができる、貴重な機会でありますので、広く、市政だより、新聞、ポスター等で参加者の公募を行い、当日は、約550名の参加がありました。

講演は、日本語、英語の同時通訳で行いました。

式次第

開　　会　　14：00	
主催者代表挨拶	福岡市長　桑原敬一
講　　演	クリフォード・ギアツ
	竹内實
	レアンドロ・V・ロクシン
	金元龍

講演する金元龍氏
Professor Kim Won-yong gave a commemorative lecture.

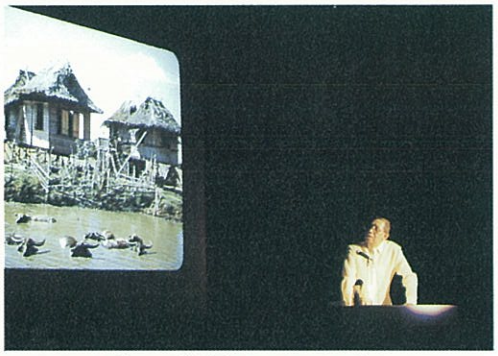


講演するクリフォード・ギアツ氏
Professor Clifford Geertz elaborated on his life experiences.

受賞者による記念講演会
The Commemorative Lecture Hall

講演する竹内實氏
Professor Minoru Takeuchi presented his commemorative lecture.

講演するレアンドロ・V・ロクシン氏
Mr. Leandro V. Locsin discussed his perception of architecture.



スライドを使って講演するロクシン氏
The slide presentation by Mr. Locsin

会場を埋めつくした聴衆
Over 550 people attentively listened to the Commemorative Lectures.